

ヒト大腸における壁内リンパ管の分布

—特に粘膜下層における分布と密度—

龍 雅峰 船橋公彦 三木敏嗣 秋嶋由里* 石井壽行* 寺本龍生

東邦大学一般・消化器外科（大森） *同大学病理学講座

序論：今まで光学顕微鏡レベルにおける毛細血管・毛細リンパ管の鑑別は困難であった。今日までリンパ管に特異的なマーカーがなかったため、形態学的に不規則な管腔構造を持った、基底膜、血管外皮細胞や平滑筋細胞を伴わず、内腔に赤血球を含まない小管腔をリンパ管と同定してきたが、どれも特異的な所見とはいえなかった。LYVE-1 (Lymphatic vessel endothelial hyaluronan receptor-1) は、今回このLYVE-1に対する抗LYVE-1抗体を用い、正常大腸組織におけるリンパ管の同定を免疫組織学的に行った。

目的：消化管のリンパ管の分布を知ることは癌のリンパ行性転移を考える上で重要である。今回われわれは毛細リンパ管を特異的に同定可能な抗LYVE-1ポリクローナル抗体を使用し、免疫組織学的にヒト大腸壁内のリンパ管構築について検索した。

材料および方法：剖検時および手術時切除標本より得た

正常大腸組織（上行結腸～直腸）を用い免疫組織学的にsm1以浅におけるリンパ管構築とsm1～3各層のリンパ管密度、リンパ管占有率を大腸の部位別に検討した。

結果：リンパ管の立体構築では、毛細リンパ管は粘膜筋板を挟むように走行し、とくに粘膜筋板下のsm1層での密度、占有率が高いことが観察された。また、結腸の部位別には毛細リンパ管の密度、占有率に差は認められなかったがsm1～3各層別に密度、占有率を計算すると、sm1層での密度、リンパ管占有率は、ともに他層に比べ有意に高い傾向が認められた。

結語：抗LYVE-1抗体での免疫染色により、ヒト大腸における選択的リンパ管の同定が可能であった。大腸においてはsm1でのリンパ管密度、占有率が高い傾向にあり、癌、特に早期癌のリンパ行性転移の可能性を考慮する上で興味ある所見が得られた。

*

*

*